伝々夢詩

No.18　　2016/04/08
愛西学園・愛知黎明教育研究所通信　　発行責任　　佐藤廣和

「情熱がなければ変わらないが、情熱だけでは変わらない。心を開かないままなら、どんな言葉（説教）も通じない。じゃあ通じるには、心を開いてもらうには、生徒の行動の生い立ちや背景にある存在をまるごとうけとめる。良いとか悪いとか決めつけない。そのまま受け入れる」と言いました。「そんなこと甘やかしじゃないの？」と私が言ったら、「受け入れる」とは「一番厳しく迫ることだ」とシスターは言いました。生徒は、シスターを裏切れないというんですね。厳しい迫りのシスターを。その後、自立。愛されているという実感がないと、他を愛するという自立への旅たちはできないんですね。自分が必要な人間として認められているという想いを持つかどうか。それから、親をはじめとして、どんな人間も悲しみや苦しみを背負っている存在である、親の苦しみを、問題を起こした生徒たちと共有するんですね。そうすると反抗ばっかりしている生徒、親の背景までわかっていくと、子どもたちはわかるんですね。親との話し合いも何度もしました。その課題を自らの課題として、押し付けられるんじゃなくて自分で選択すること。苦しんでいる生徒に関わること。行動を通して、社会の中で求められている存在なんだという実感がわくこと。

この文章は「青年協　春の学校」で行われた佐々康子先生の講演記録の一節です。退職協ニュース「緑の広場」第144号に掲載されたものですが、いつも穏やかで上品な語り口の佐々先生の顔を思い浮かべながら一気に読みました。娘の高校進学の際、親として一番行かせたかった学校である聖霊高校が、募集困難に陥った時期があったとは思いもしませんでした。1学年4クラスだったのが中学が1クラスしか集まらないという大変な事態が瀬戸への移転後生じたそうです。1980年の廃校危機から私教連アンケート「入れてよかった」が女子校トップの86％に飛躍した秘密が詳しく語られています。黎明から参加した2人の先生の感想文も「緑の広場」には掲載されています。

上の文章は佐々康子先生（現・退職協会長）と聖霊にいたシスター・アンジェラとの会話を再現したものです。型破りのシスターから学んだ教師としてのまなざしが、佐々先生の和やかな笑顔に映されていることが詳しく語られています。『大きな学力』にも紹介されているこのエピソードを、昨年度多くの退学者を生んでしまった本校の現状と重ね合わせながら読みました。そして人間教育の基本は子どもをとらえ、向き合う時の教師のまなざしにあるのではないか、とあらためて感じた次第です。

第9回　退職協文化展

日程：2016年5月10日（火）から5月15日（日）まで　9：30～18：00（最終日は17時）
会場：名古屋市民ギャラリー栄（7階・第1展示室）＊中区役所と同じ建物です
分野：絵画・写真・書道・彫刻・工芸・刺繍・詩・短歌・俳句など
入場無料
＊昨年、佐々先生は組写真を出品していました。佐藤も写真を3点出品する予定です。